

開催地名：埼玉県さいたま市緑区	
開催日時	令和２年２月２６日（水） １４：３０ ～ １５：３０
開催場所	プラザイースト
語り部	菊池 健一 （宮城県仙台市）
参加者	緑区役所職員、地域住民 約 120 名
開催経緯	緑区では毎年、避難所運営訓練を行っており、避難所運営の質の向上と共に区民の防災意識の啓発に努めているが、関東地方は地震災害から年月が経過し、災害意識が薄れてしまっているのが課題となっている。今回語り部の講演をきっかけに、改めて地震災害について学び、防災意識の向上につなげたい。
内容	（１）震度７の揺れ 東日本大震災でわが町は震度７の烈震を記録した。揺れが落ち着いてから、私は近隣の安否確認に回った。若い人は働きに出ていて在宅するのは高齢者か学齢前の子どもが多く、皆泣いていた。 また、仙台市は 11.5 メートルの津波の被害を受けた。海面が 11.5 メートル高くなった状態で海水が押し寄せ、海岸から 3 キロ以上内陸まで浸水した。 （２）避難誘導について 町内会では、大規模災害に備えて、毎年、避難訓練を行っていたが、東日本大震災では、ほとんど役に立たなかった。激しい揺れに動揺する中、道路は寸断され、携帯電話、固定電話ともつながらないため、火の始末、出口の確保、家族への連絡、周りの人の安否確認等、身を守る全てのことができなかったからだ。 避難所への避難についても、速やかに移動できない人たちが、複数見受けられた。私は３つの町内を避難誘導して回ったが、通帳と印鑑を探して逃げない高齢の女性がいた。強い口調で避難を促した。後に感謝されたが、災害時は毅然とした態度で避難を促さないといけない。 （３）避難所の運営 避難所の運営についても、スタート時点からきちんと機能はしなかった。運営を阻害したものとしては、情報の不足、燃料の不足、通信手段の不足の３つがあげられる。また、１つの避難所に、８つの町内会が集まっており、町内会ごとでは避難訓練を行っていたが、合同では実施していないため、連携がきちんといかず、運営に支障が出た。地震４日目まで物資が届かなかったことも不安をあおった。避難所生活での主な問題点は以下のとおりである。 ① トイレの不足 トイレの数が不足していたため、新設を他県にお願いしたが、届くのにかかる時間がかった。

② 避難所内のスペースの問題

早く避難所に来た人から場所を確保するため、お年寄りや女性は、入口近くの寒い場所しか空いていない事態が発生した。また、高齢者の早寝早起きの生活リズムが崩され、体調を崩す方も多かった。着替える場所がないことも、女性にはストレスだった。さらに、一人でいるのが怖い、食べ物が貰えるという理由で避難所に来る人もいたが、自宅で暮らすことのできる人には、帰宅してもらった。

③ ペットの問題

避難所にペットを連れて来た人もいたため苦情が発生したが、ペットは癒しでもあるので、人の生活場所とは別のところにペットの避難所を作って対応した。

④ 指定避難所に慰問が集中

他県から慰問で来て、手品や吹奏楽の演奏が夜間にも及ぶことがあった。そのようなケースが連続して発生すると、苦情が出るようになった。実施頻度や実施する際の時間等について、調整が必要である。

(4) 震災の教訓

災害時には食料や燃料の不足が予想される。日頃から数日分の食料と水を備蓄しておくことはもちろん、車の燃料も、満タンを維持するように心がけていただきたい。

また、運ばれてきた物資の運搬や、避難所の掃除など、手伝ってくれた子どもたちの活躍が目立った。東日本大震災以降、学校を含めた地域、行政が連携して、積極的な訓練の実施を行うとともに、町内会行事等に積極的に参加して近隣の住民とのコミュニケーションをとっていくことの必要性を感じた。そして何より求められるのは、行政、町内会、民生委員等との連帯を密にし、情報の共有化を図ることであり、迅速な判断と行動が必要である。



開催地より

実体験に基づく貴重なお話を聞くことができ、今後の自主防災組織の拡大、連携強化と避難所運営組織の連携に繋がっていきたいと思う。